

むかし、あるところに、かさやさんがいました。あるとき、かさやさんは、かさをたくさん作って、家の前の庭でほしていました。そこへ、風がふいてきて、かさが飛びそうになりました。かさやさんは、

「かさが飛んでいったらこまる」といって、走って取りに行きました。ところが、そこへまた風がふいてきて、かさやさんは、かさをつかんだまま、かさといっしょに飛んでいってしまいました。

かさやさんは、どんどん飛んでいって、雲の上に着きました。すると、そこに、かみなりさまがいました。かさやさんが恐^{こわ}くて、小さくなっていると、かみなりさまはいいました。「おまえ、ちよつと手伝^{てつた}いしてくれないか。おらは、ぴかぴか、ぐわらぐわら、ぐわらとやるから、おまえは、そこのおけの水をひっくり返して、ざーっと、下へまいてくれ」

かみなりさまは、そういつて、ぴかぴか、ぐわらぐわら、ぐわらとやりました。そこで、かさやさんは、「そりゃー」といつて、おけの水をひっくり返して、ざーっとまきました。すると、下では、村の人たちが、「そら、夕立^{ゆうだち}だ」といつて、走りだしました。かさやさんは、おもしろくておもしろくてたまりません。いっしょうけんめい、かみなりさまの手伝いをしました。

どれほど手伝いをしていたやら、あるとき、足がすべって、雲の上からまっさかさまに落ちました。どこかの家の屋根^{やね}に落ちたと思つたら、ぽかっと目が覚^さめました。みんな夢^{ゆめ}だつたそうです。

おしまい

村上郁再話

資料『越中射水の昔話』伊藤曙覧／三弥井書店